

「揺らぎ」のよりどころとしての大学～ 「考程」を育み、社会に裨益する研究の オアシスに

平山 恵
社会医学系講師

行動しながら観察のセンスを磨く

「国際協力をしたいがどんな勉強をして、どのような進路を設定したらよいか」という質問を学生から良く受ける。私はその質問には直接答えずに、「日本国内の問題に敏感か」と自問してもらうことにしている。大学生活を見ただけでも、自身が関係しているが、無関心である課題がごろごろしている。例えば、医学専門学群の学生食堂のごみの量。山積みのおりもの廃棄ごみだけでもごみ箱からはみだして落ちている異様な光景だ。（不快感を感じないのか？）学内のゴミの量を減らすプロジェクトを友人と手がけてみよう。地球環境に取り組むセンスを磨けるであろう。また、海外に飛び出す前に、大学から飛び出して周辺の農家の人々と農業問題について語りあう。世界の農村の問題が見えてくるはずだ。

良識を養う

私が国際協力に関わりはじめた1980年代と違って、昨今はどこにいても情報が得られ、学生も青年海外協力隊、日本政府お抱えで国連機関で働き始める制度、国連ボランティアと、国際協力の入り口が増えている。

大学においても各地で国際協力の研究科が設立されている。その結果、発展途上国での調査をして卒業論文、修士・博士論文にする学生も増えてきている。比較的行きやすいタイやフィリピンは学生の観察の場になっている。特に日本の政府開発援助（ODA）や非政府機関（NGO）などが関与しているプロジェクトサイトには日本人学生の姿がよく見られる。フィールドに出かけていくこと自体は奨励される。しかし、そのフィールドワークが受け入れてくれた地域を台無しにしない「良識」を学生がもっている

か、不安である。

論文の締め切りがあるために、短い時間に多くのデータを収集する。村人はとても忙しくなる。一部の村人に調査手伝いのお金が支払われ、村人にあぶく銭を渡すことになる。お金をもらっていない村人のジェラシーを引き起こして村が混乱する。「発展途上国を研究対象としてのみ見ていると、途上国にマイナスの影響をも及ぼしかねない。」と複数の指導教官は嘆く。外部者として、学びの徒として当然持つべき倫理があるはずだ。何が許され、何を慎むべきかは、その人の良識に掛かる。この良識は、まず日常生活での他人とのインターアクションの中で養われる。その上で、「おじゃま」させて頂いた国の規範など、その国固有のものにも気配りする必要がある。基礎は本人の「良識」の問題なのだ。

異なる場に身をおく

「何を言っているのか分からない。」というメッセージを聴衆の「顔色」より読んだ。昨年、農林工学系で話をさせて頂いた時のことである。聴いている人びとの「領さ」がない。医学に集まる聴衆とは違う。メッセージの伝え方を変えながら、聴衆の反応を伺う。専門家よりも一般の人に向けて講演に慣れている私が戸

惑う。

聴衆は農業技術を専門としている方が多かった。ステージが違うと私の「踊り」に対する反応が違う。こちらも踊り方を変えないといけな。依頼してこられた教授の注文に答えるように準備をしたつもりだったが、質問の音色が違った。講演会が終わった後、農林工学の教員の方々と食事をしながら、フィードバックを頂いた。考える筋道（考程）の違いが分かった。自分のホームグラウンドでの講義より「どきどき」して学びが多かった。また、他人のステージで踊って、あの違った「考程」を体験したいと思った。

私が担当している国際総合学類や環境科学研究科の学生が聴講している。当然ながら、彼らの闖入で質問は多様になる。保健経済の話の後には、経済を専攻している学生が医師の卵に経済学を解説している。また、医師の卵から発せられる質問にエコノミストの卵が戸惑いながらも答えようとしている。彼は経済専攻の同級生が多いホームグラウンドから離れた「場」で別角度から経済をレビューしている。保健経済も保健学を先に学んだものと経済学を先に学んだ者どで随分解釈が違ってくる。

分野を超えた国際協力についての同好

会「筑波地域発展研究会 (HEALs)」を筑波大学の学生、教員、周辺の社会人で設立した。活動会場が医学系棟から遠い国際総合学類や農林学系の教室になることが多い。医学からわざわざ出かけてまでも、と言う同僚もいるが、いざ「よその家」を訪ねてみると、学ぶことが多い。掲示物が違う。研究室のドアに貼っている研究グループ名を見ていて「こういう考え方の分類」があるんだと感心する。「よその家」を訪問することはおもしろい。

国際協力の現場は分野ごとに問題が存在することはありえない。そのため、対策も学際的なアプローチが必要である。少なくとも他分野の話題が大まかに把握できていないと話にならない。

身辺の裸足の「研究者」より学ぶ

「現在失業している路上生活者に支えられてきた日本の経済システムの上で僕たちは生活しているということともに、路上生活者の中に大学卒業生も多くいるという事実と直面させられた。自分もいつか路上生活者になる可能性があるということとは否定できない。雨の中でもタフに生きている路上生活者とコミュニケーションをとることに关して今までは多少の不安を感じていたが、一人一人とコ

ミュニケーションを取っていく中でその不安もかき捨てられていった。公共事業に使っているお金を人的インフラ整備にもっと役立ててはと思う。」

医学専門学群6年生の公衆衛生実習での感想である。東京の山谷で日雇労働者の人々の健康作りを学ぶフィールド・ワークである。野宿をしている人々の結核が問題になっていた。どのような経緯で結核が拡がっているかを自分で見て分析する。野宿している人の方が結核の感染についてよく知っている。そこに患者が生活しているのだから当たり前の話だが。

「南アフリカと日本の農家が同じ問題をかかえていることが分かった」「14年間も教育を受けていて、食べ物については何も知らない自分に驚いた」

国際、環境、医学の学生と国際協力事業団 (JICA) に来ている南アフリカの研修生と一緒につくば市近郊の伊奈町の農家を訪ね、農業の持つ問題をインタビューする。専業農家は農業政策、農薬科学から世界経済まで、よく研究している。農業で生きているのだから切実である。

不況を体感するような企業で働いたことがない人間、切実さがない教員・研究者と学生のみがつくる大学社会で閉じこ

もっているのは実社会とのギャップがあまりにも大きい。(世界の人々と対峙するのなら、なおさらである。) 大学を一步踏み出すと、素晴らしい「考程の場」が拡がっている。刺激を与えて下さる人々に囲まれている。周りの裸足の「研究者」から多く学べる。今後、人、社会にかかわる研究は、現場に出かけ、実際に人、社会との「インターアクション」「考察」を交互に重ねていくことが大切になるだろう。ただ単に現場に出て行けばよいというものではない。現場に出る前に考え、周りの専門家(教員、学生)と語り合う、そして又考える。現場で観察し、人と話して考える。そして、現場から大学に戻ったときに、再度考え、語り合うという大学本来の「考程」の重要性を再認識したい。この「考程」を丁寧に繰り返すことで、「良識」が醸成され、前出のような現場でのその地域の搾取も自ずから減ると思われる。

インターアクションをして考え裸足の「研究者」からたくさんの智恵をもらうことが多くなるのではないか。そういう場に学生も立会い新鮮な意見をぶつけてもらうことが研究・教育を両方できる大学の特性を生かしていることになる。

自らを揺さぶる

私はイエメンで妊産婦死亡率の調査を行っている。国際援助の名目で分娩台で出産する姿勢を先進国からの技術移転として推奨されている。「科学的」だという思い込みで伝統的出産姿勢(横向きや膝つき姿勢)が非科学的という汚名を着せられている。産科のテキストに書いていることが必ずしもより科学的だとは言えない。自分を揺さぶり、価値観を再点検する覚悟が必要である。

科学は研究はこうでなければならないのだという思い込みから自分自身を開放する勇氣を持ちたい。研究者は複写業ではない。弟子が教授の研究のコピーをしているのだけでは悲しい。自発性の上に研究があり、そこに新しい創造のエネルギーが宿る。自分自身を揺り動かしたい。また、他人の建設的「攪乱」も手伝いたい。また、同僚の研究者や学生が揺らいでいる時に、致命的な失敗にならないような支援をしたい。失敗が許されるような場「さすが」や次に生かせるような装置(ソフトウェア)を準備するのが大学の特質である。

以前は「学生には頼れない」と思い込んでいたが、このところ学生からの新鮮な指摘で問題が解決する経験が続いた。時には学生にコメントを乞い、別領域に

自らを置いてみたり、裸足の研究者からのアドバイスも受け入、よどんだ空気を浄化したい。

試行錯誤する「考程」を保障する場に大学のあり方としてまとめてみる。

1. 観察のセンスを磨く教育の場となる。
2. 知識だけでなく、良識のセンスを養うことも念頭におく。

3. 異なる「場」の中で専門性を磨く。
4. 学者でない裸足の研究者である当事者とのインターアクションを取り入れる。
5. 自分を揺るがしながら、新たな発見を見出す。

春。思い込みのマントを自ら脱ぎ捨て、新風を楽しみたい。

(ひらやまめぐみ 国際保健学専攻)

